



詩人W. B. イェイツの像前にて  
(イェイツの故郷、アイルランド  
のスライゴ)

授陣のもと、極めて意義深く、中身の濃い鍛錬を重ねることができた。大英図書館を拠点としつつ、オックスフォード、エジンバラ、ダブリン、ジュネーブの図書館に赴き、エッジワースや彼女に影響を与えた啓蒙思想家たちに関連した手稿・資料を手ずから調査したのも、貴重な体験である。成果を基に英国・アイルランドの複数の学会で行った研究発表と、ロンドン大学での非常勤講師の経験も現在の教育・研究活動の糧となっている。充実した留学生生活を送ることができたのは、高橋和久先生、G・E・H・ヒューズ先生をはじめとする東京大学の諸先生方に学部より鍛えていただいた基盤なくしてはありえなかったと痛感している。

### ▼コスモポリタン・ロンドン留学生活

近辺にあった。寮生の出身国は五〇カ国を超え、異文化を背景とした多様な価値観を交換するだけでなく、専門領域を超え各自が取り組む最先端の問題を語り合うこともできる、刺激的な国際社会の縮図であった。普段は相互の文化を尊重するコスモポリタン・友好的な雰囲気ながら、時に摩擦が起こる。談話室の購読新聞削減で、何語の新聞を残すか問題になった時などだ。利害が絡むと平和的共存の日常にも一瞬にして緊迫が走るといいう、国際政治の現実を垣間見たような気がした。

寮には大学教員の寮長が住み込み、寮生が学業に専念できるようサポートする。それは、新聞騒動のような事件の調停から、研究上の相談、社交行事の企画等多岐に亘る。教員または院生の副寮長と院生の委員数名が非常勤でその補佐にあたる。住宅事情の厳しいロンドンで、寮長の補佐委員になれば継続して住めると聞き、欠員募集に応募したら採用された。後には副寮長になり(日本人では初めてだったらしい)、大変なこともあったが、論文執筆環境確保のため学業の傍ら続けた。苦楽を共にした寮長補佐チームのメンバーとは、留学中に親しくなった他の友人たちと同様、今でも固い絆で結ばれ、

世界各地に点在しながらも定期的に連絡を交わしている。

### ▼「終わり」は来るが、旅は続く

PhD論文提出間近の院生にとって「終わり」は近いようで遠い。血の滲むような思いをして一〇万語相当の「最終稿」脱稿後、「最後の推敲」を繰り返して、印刷に漕ぎ着けても神経衰弱のような校正がはじまる。無事論文を提出し、数カ月後の学内外審査員による口頭試問(一〜六時間)に合格しても、大概の論文は修正を求められ(印字ミス訂正から一八カ月猶予付きの大幅な修正まで何通りかある)、修正済みの論文を再提出することになる。学位記を手にするまで、「最後の推敲」に着手してからかなりの月日が経っていることが多い。しかし私にも「終わり」は来た。ロンドン、東京を問わず折にふれ激励してくださった方々のご厚意は忘れることができない。

帰国後の就職先は、当時の日本経団連会長奥田碩氏の母校二橋大学であった。日本経団連会員企業に多数の卒業生を輩出することでも知られている大学で、石坂財団および日本万国博覧会記念機構の援助のもと英国で学んできたことを還元できる機会を得たことは不思議な巡り合わせであった。今後

も初心を忘れず教育・研究活動に精進したい。

# 英国への旅は続く

一九九八年度国際文化交流財団海外派遣生。九六年東京大学文学部卒業。九九年同大学院文学修士。九八〜二〇〇四年ロンドン大学院留学。その間、英国アイルランド研究協会研究奨励賞受賞。二〇〇五年ロンドン大学院PhD(哲学博士・英文学)。二〇〇四年より現職。今年度より三年間の予定で、科学研究費若手研究「女性小説家と愛国主義の創作—十九世紀前半英国小説を中心に」に研究代表者として取り組む。



一橋大学法学部専任講師

吉野由利

よしの ゆり

「なぜPhDコースに進みたいのか、ではなく、進まなければならないのかと、決める前によく考えなさい」——英国PhDサバイバルガイドと謳った本の中で、最も説得力のあるアドバイスであった。「専門性の高い勉強を続けたいから」、「資格として持ちたいから」等といった漠然とした動機では駄目で、二〇〜三〇代という人生で貴重な時期を“sacrifice”してまでやらねばならないという覚悟がなければ、必ず後悔するほどリスクの高い進路なのだ、と警告が続いていた。真剣な動機を持っていたつもりだが、ロンドン大学留学前に読んでいたら一瞬躊躇させられたかもしれない真理がそこにはある。

その大きな挑戦に旅立つことを可能にしてくれたのは国際文化交流財団(石坂財団)の海外派遣制度であった。私が留学

を志した当時の大学院留学奨学金は「実学」偏重で、文学専攻の院生に門戸を閉ざしているものが多かった。財団の多様な研究領域を支援する方針には今なお深い感謝の気持ちで一杯である。

## 十八、十九世紀英文学研究と現代日本

十八、十九世紀英文学を専門にしていると言うと、浮世離れた世界に漂泊していると思われるようだが、私の研究テーマは現代日本と関連性が高いと考えている。PhD論文の焦点は、十九世紀初頭前後に活躍したアングロ・アイリッシュ系作家マリア・エッジワースの小説が、「国民国家

と個人の関係はいかにあるべきか」、「その関係に、文化や宗教、民族的出自の共通性は必須か」等の問題をめぐる当時の英国・

●国際文化交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三カ国の大学・大学院へ一六八名の日本人留学生を派遣するとともに、世界四〇カ国四七八名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

アイルランドの論争にいかにか介在したのか、という問いであった。西欧で啓蒙主義コスモポリタン思想からロマン主義ナショナリズムへパラダイムが転換しつつあったとされる時代である。現代日本では日本国家、日本国民のアイデンティティをめぐって断続的に論争がなされてきたが、その言説に小説がいかにか関わっているか考察する論文の十八、十九世紀英国・アイルランド版とも言える。

エッジワースは現代において知名度が低いものの、スコット、ツルゲーネフらに多大な影響を与え、当時は英国内外で高く評価されていた。作品は機知に富み、イングランド・アイルランドの両方に帰属しているように見えながらも疎外されているのが現実であった、アングロ・アイリッシュ系地主階級の危機意識に基づく洞察に満ちている。

留学先では、エッジワースおよびアイルランド文学研究の第一線で活躍中のW・J・マコーマック教授を中心とした指導教